

隨泉寺寺報

平成17年(2005年) 12月号 第424号

TEL 082-892-0217 <http://www.ttec.co.jp/~zuisenji/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺
報恩講法座

講師 西法寺住職 小田篤生師

講題 「慈光(みひかり)の中(うち)に、
君(きみ)あり、我もあり」

『一 一念の信心をえてのちの相続といふは、さらに別のことにあらず、はじめ発起するところの安心を相続せられてたふとくなる一念のころのとほるを、「憶念の心つねに」とも「仏恩報謝」ともいふなり。いよいよ帰命の一念、発起すること肝要なりと仰せ候ふなり。』

「蓮如上人御一代記聞書」31条 『註釈版聖典』 p 1242

一念の信心を得てのちの相続ということは、まったく信心と別のものがあらわれるのではない。最初に起こったところの信心を相続させていただいて尊くなる一念のところが生涯を通して続くのを指して、「憶念の心つねに」とも「仏恩報謝」ともいうのである。いよいよ帰命の一念、すなわち信心を発起することが肝要であると仰せ候られた。

12月の法座予定

- 12月11日.....掃除 望ヶ丘
- 12月14日昼席午後1時より.....報恩講法座
- 12月14日夜席午後7時半より.....出張法座 桑原 木村剛氏宅
- 12月15日朝席午前10時より.....報恩講法座 おとき
- 12月15日昼席午後1時より.....報恩講法座
- 12月31日午後11時より.....除夜会
- 1月6日午後6時より.....門信徒会本部役員会



☆除夜会・修正会法要

12月31日(土) 午後11時～

今年も例年のように除夜会法要並びに除夜の鐘つきを行います。11時から本堂でお正信偈のお勤めの後、11時半過ぎから鐘の前でお勤めします。12時を過ぎたら本堂で修正会のお勤めをいたします。大根の炊いたものや甘酒を用意しますから、誘い合わせてお参り下さい。豪華なくじ引き?もありますから期待してください。



☆振り返ってみると・・・

今年もあと一月になりました。月日のたつのは早いものです。先月の11月1日は私達の結婚記念日でした。昭和55年でしたので25年経ったわけです。つまり銀婚式という事です。



一口に25年と言っても色々ありました。まだ中野東駅は無かったし、瀬野か中野から帰っていました。モリイは空き地でした。カンダ鉄工は毎日いそがしく操業していましたが少しうるさかったのも事実です。門前さんや中野さんがご健在で、色々力になってくださいました。生まれ育った所や、京都とは、だいぶ事情が違っていましたので、驚く事も沢山ありました。

しかし今ではそれが当たり前になっているので、もう中野の人になったのかなとおもいます。自分では、僕が我慢してきたと思っていますが、どう考えても、皆さんに我慢していただいたのでしょう。これから先の25年と言う事になると気が遠くなりますが、皆さんと一緒に年を重ねて、ご法義を深めていけたらいいなあと思います。

☆余談

広島カープに今年のドラフトで入団する事が決まった【梵 英心】(そよぎ・えいしん)内野手(日産自動車)25才に注目しています。バットを短めに持つ打撃スタイルながら、強打を併せ持ち、また守備力も今ドラフトでは屈指。カープは来季からブラウン新監督が指揮を執る。「日産でもゴーンさんが社長。上司が外国人でも大丈夫です」と報道陣を笑わせた。ちなみに 梵 英心 (そよぎ・えいしん)選手は三次の浄土真宗本願寺派の専法寺長男です。実はお母さんが私のいとこです。本人は知りませんがお父さん「住職」はよく知っています。来年からは市民球場へ応援に行かなければなりません。楽しみにになりました。



☆御礼

永代経懇志 金 貳拾萬円 細工 誠人殿 故 細工 環様 特別永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 細工 誠人殿 故 細工 環様 香典返しとして

☆御礼

寒くなってきましたのでストーブが必要な季節となりました。という事で仏婦から庫裏で使用するストーブを3台寄付していただきました。これで暖かい冬を過ごす事が出来ます。

孤独と社会

人間は、いつも二つの矛盾した中で生きています。その一つは、独りであるという厳粛な事実であり、他の一つは、一人では生きられない、仲間がほしいという実態です。所詮一人生まれて一人死んでいく、誰もたとえ一分でも、代わって生きてはくれません。病気で苦しんでいる人を見ると、代われるものなら代わってあげたいと思うけれども、残念ながら代わることは出来ません。

また同時に、一人で生きられるなら、これくらい気楽なことはないと思う事もあります。人と人の付き合いぐらい、わずらわしいことはありません、人の目を気にしたり、反応が怖いことです。



一方、一人では生きていけません。人間という字は人の間と書きます。人と人の間わりの中で生きています。人間は群れを作って生きていくと言ってもいいでしょう。

京都で一人で過ごした事があります。友だちもなくて、知ってる人もいない。人は沢山いるけれども、話す相手がいないということは、本当に寂しいものです。



また多くの人々によって生かされているともいえます。食べるものどれをとっても多くの人々の手に懸かっています。一人で生きるといっても、結局は多くの人々の助けがないと生きられないと言う現実があります。

戦後日本の目指してきたものは、欧米に倣って、自由と自立という事です。これは言い換えてみると、社会の中の孤独というものなのかもしれません。

最近、矢野の小学生が何者かに殺されるという事件が起こりました。白昼、家が立ち並ぶ中で、殺害され放置されるという事件です。なぜあんなに家が立ち並ぶ中で、誰も目撃者がいないのだろうと不思議でした。しかしこれこそ今の日本を、象徴している事だと思います。隣が何をしても、「我、関せず」という生き方の現われと、思われます。塀を作り、カーテンを引き、誰にも何も見せず、干渉しないし、されないという姿勢です。この頃、外で立ち話をしている姿をあまり見なくなりました。

少し前までは近所のおばちゃんや、頑固なじいさんが注意をしてくれました。面倒くさい事もありましたが、大切な事を教えてくれました。うっとうしい事もありましたが、気付かしてもらいました。同じ時代に同じ所で生きるということは、共に生きるという姿勢です。確かに私一人が自立した生き方ではなかったかもしれません。しかしひとりではなかった。孤独ではなかった。



この孤独的な存在であると同時に、社会的な存在であるという相反したなかに生きているもの、それが「苦悩の有情」と言われる私たちのすがたでありましょう。

北原白秋は、こんな詩をつくっています。

二人で居たれど まださびし 一人になったら なほさびし
しんじつ二人はやるせなし しんじつ 一人は耐へがたし

かつて〈群衆の中の孤独〉ということばがよく用いられました。哲学者の三木清も、「孤独は山のなかにあるのではなく、街のなかにある。一人のひとのなかにあるのではなく、おおぜいの人間の間にある。」

と書いています。人間はどこまで行っても孤独を背負うて生きているのです。

人という文字は、何か支えがなければ倒れるという意味をあらわしていますが、この人生のなかで、末通ってこの私を支えきってくれるものはありません。何ものをも当てにならぬと知られたとき、苦が生まれます。悩みが生じ、絶望の涙を流したりします。その抜きがたい苦悩を抱く私たちがあればこそ生まれたもの、それが阿弥陀如来の「汝救わずば」の誓いでありました。私があつて佛のねがいが生まれたのです……。



12月カレンダー 東井 義雄

「生」も「死」も
すべては「み手のまん中」

私のような者も、拝まれ、祈られ、赦され、生かされている。幼い時からずっとずっと、こういう私によりそって、はらたきづめにはたらいてくださったはたらき、願いがあった。

大人にも、子どもにも、私たちひとりひとりにかけている大いなるもの願いがある。

生きるための一切の努力も役げ捨てて、眠りこけていた私であったのに、目が覚めてみたら生きていた。いや、生かされていた。

どんな荒れ狂う川の水も、おさめとっていく海のように必ず摂取される世界があった。

その世界のどまん中に、私は生かされていた。背いているときも、誇っているときも「み手のまん中」であった。

(注＝「み手」とは、仏さまのお救いの手のこと)

